

○ 調査問題

問題の学力のレベル
レベル7-B

4 次の の中の文を、意味をかえずに、二つの文にします。

A に入る言葉をあとの の中からえらび、**れい文** にならって書きましよう。

しかし、だから、つまり、たとえば

たくさん練習をしたので、明日のしあいはきっと勝てる。

れい文

しかし、
いっしょうけんめい走った
いっしょうけんめい走ったが、一番になれなかった。

一番になれなかった

○ 調査問題の趣旨・内容

「文と文のつながり方と接続語の働きを理解する力」が身に付いているかどうかをみる問題

【問題内容】 一文の意味を変えずに接続語を使って二文に書き換える。

【作成の趣旨】 この問題は文と文のつながり方と接続語の働きを理解しているかをみる問題である。

この問題では、問題文の意味を考えて接続語を適切に選別する力が求められる。このような力は、「説明的な文章」を読む力にも結び付くものとなる。また、日常生活で、筋道を立てて論理的に物事を把握したり、考えを適切に伝え合ったりする基礎的な力にも結び付いていく。

○ 誤答分析

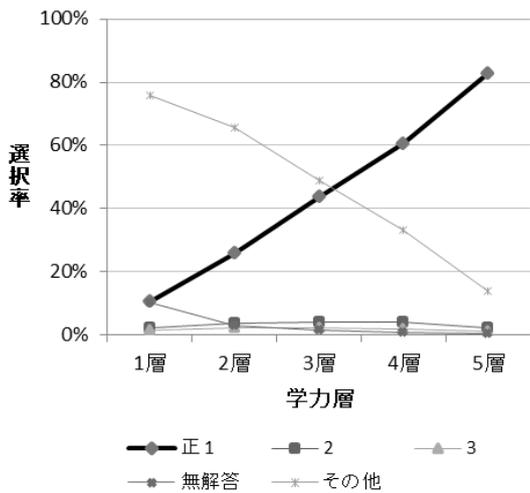
出題のねらい	解答類型	2	3	無解答	その他
	①正答	文の一部が抜けているが接続詞を解答している	文は正しいが接続詞を誤って解答している		
文と文のつながり方と接続語の働きを理解する	46.8%	3.2%	1.7%	2.7%	45.7%

正答率は46.8%、その他が45.7%という結果であった。

その他の誤答としては、例文があるにもかかわらず、例文を活用できなかったこと、問題の意図がわからずに問題を丸写してしまったことなどが挙げられる。また、誤字・脱字も目立った。

6年生の問題においても、接続語の正答率は低い。学年が上がっても、接続語を理解することができていないとも考えられるため、中学年の段階で学ぶべき内容を確実に身に付けさせることが大切である。

○ G - P 分析



- 全体の正答率は、46%と予想を下回る結果となった。
- 下位層から中位層に該当する児童は、その他が正答率を上回っている。特に1層に該当する児童は、正答率が10%程度であり、その他の解答率が75%という結果である。下位層の児童ほど、例文を活用できなかったとも言える。それに対し、5層に該当する児童は、正答率が80%以上という結果である。正答につながる知識を有しているのが層の高い児童に偏っており、理解の状況に大きな違いがあることがうかがわれる。
- 教科書での文と文のつながり方と接続語の働きを学ぶことにかける時間は、すべての児童に理解させるには短く、時間をかけ繰り返し指導する必要があると考えられる。

○ 指導上の改善ポイント

単元の学習時間だけの取り扱いではなく、国語科を中心とした日常生活の様々な機会の中で、接続語に対する意識を持たせ、活用させていくことが求められる。



児童の主体的な学びを促進するため、ゲーム感覚で文と文のつながりと接続語の働きを理解させる指導

接続語の中でも順接の「だから」や逆説の「しかし」を中心に指導する。これらの語は互いに反する意味をもつため、その違いを理解しやすい語と言える。また、同じ文でも接続語の違いによって話し手の気持ちが変わることを指導することで、接続語の理解を深める。ここでは、意図的に児童自身が経験したことや身近に感じられる例文を用い、日常生活の中で、効果的な活用ができるようにしていく。

- ①例文をいくつかに分けたカードで用意し、これらのカードを組み合わせる活動 ➡ 一文に直す活動の中で接続語のもつ意味を理解させる。

例文	雨がふった	だから	運動会は中止になった
	雨がふった	しかし	運動会は行われた

- ②例文のカードを用意し、そのときの気持ちに合った絵のカードを探して組み合わせる活動を行い、話し手の気持ちを表すことを理解させる。

がんばって勉強した	だから	90点だった
がんばって勉強した	しかし	90点だった

- ①・②の活動とも ➡ 一人で考える ➡ ペアまたは3人グループで考える ➡ どんなことに気が付いたかを全体で交流する。

- ③「だから」「しかし」のカードを裏返しておく。

一人が一文を言う。もう一人がカードを引き、そのカードの接続語を使って、続きの文を考える。

「今日の記事には、『しかし』を使った文を一文入れること」や「明日の朝のスピーチには『だから』を使って話すこと」など、授業以外の活動の中でも子供たちに接続語を意識させることが大切である。

○ 調査問題

問題の学力のレベル
レベル 8-A

5

次の文章の——線部は何を指していますか。文章中より書きぬきましょう。

朝起きてみると、庭に——一りんの花がさいていました。それは、ふくじゅ草と
いうお正月を祝う花だとお母さんが教えてくれました。

○ 調査問題の趣旨・内容

「指示語の役割を理解し、指示語の示す内容をとらえる力」が身に付いているかどうかをみる問題

【問題内容】 指示語の示す内容を文章中から書き抜く。

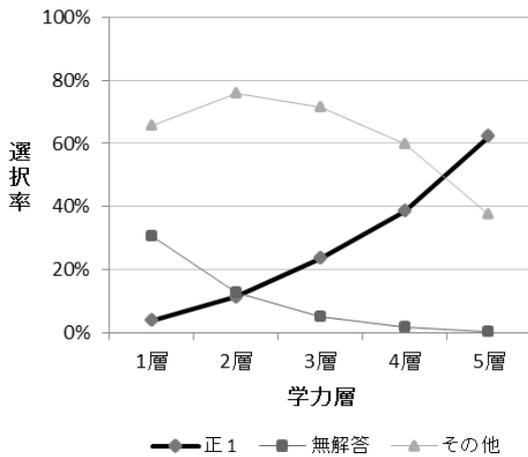
【作成の趣旨】 この問題は、指示語の役割を理解し、指示語が示す内容を正しくとらえることができるかどうかをみる問題である。指示語は、文や文章の構成にかかわる語で、文章の論理的な関係を構築する上で大切な役割を果たしている。

指示語を理解し、指示語の示す内容を正しくとらえる力は、文章の内容を正しく理解し、文や段落相互の関係を理解する上で必要な力である。

○ 誤答分析

出題のねらい	①正答	無解答	その他 以外
指示語の示す内容をとらえることができる。	29.5%	8.9%	61.6%
<p>「一りんの花」が正答であるが、「一りん」がなく「花」という解答も許容範囲とした。</p> <p>「それ」が示す内容を「(一りんの)花」と捉えられず、他の言葉を選んだ児童が61.6%、無解答の児童が8.9%と約70%の児童が指示語の示す内容を正しくとらえることができていない。</p> <p>他の言葉を選んだ児童の誤答は、「ふくじゅ草」が約20%、「ふくじゅ草というお正月を祝う花」が約14%で、指示語の後に記述されている言葉や部分を選んでいるものが約34%であった。また、「庭に一りんの花がさいていました。」と、指示語の前から選んではいるが、「それ」という指示語と入れ替えて読むと、意味が通らなくなる部分を書き抜いているものが約11%であった。</p> <p>指示語が示す内容を、与えられた選択肢から選ぶのではなく、文章中から自分で選んで書き抜かなければならないことも、この問題で正答率が伸びなかった要因の一つとして考えられるだろう。</p> <p>指示語は、日常の話し言葉の中で「現場指示」として頻繁に使われているが、書かれた文章の中で、改めて何を示すかと問われると戸惑ってしまう児童が多いことがわかる。読む活動、書く活動で、文脈に沿って指示語の役割や指示語が示す内容を理解させ、「文脈指示」の指示語を使えるよう指導していく必要がある。</p>			

○ G - P 分析



- 全体の正答率は、30%程度と、全問題の中で、最も低い正答率であった。
- 正答率が、誤答率を上回っているのは、5層のみである。しかし、その5層の正答率も、全問題の中で最も低く62%である。
- 4層においては、全問題の中で、本問のみ、正答率が誤答率より下回っている。正答率は40%にも満たない。
- 3層は、正答率が24%、誤答率71%、無解答率5%。無解答率の割合が4層、5層に比べ、増加している。
- 1層、2層においては、誤答率のみならず、無解答率も増加し、どちらも正答率より上回っている。
- 「文脈指示」の指し示す内容をとらえることが、高位層の児童にも、難しいということが読み取れる。
- 層ごとに、段階を追って指導することが必要と考えられる。

○ 指導上の改善ポイント

指示語には、談話の場で実際にあるものを指す「現場指示」と、談話や文章中にあるものを指す「文脈指示」がある。これらを指導するに当たって、まずは、「現場指示」の指示語を、次に「文脈指示」の指示語と、段階を追って指導していくことがポイントとなる。そして、児童にとって、理解が十分でない「文脈指示」の指示語については、説明的文章や文学的文章を読む学習の中で意図的に指導していく必要がある。

第一段階 「現場指示」の指示語 ～「こそあど言葉」を使って、ペアで会話を楽しもう。～

① 「現場指示」の指示語を集める。

・この本 ・あの絵 ・それは、何? ・どれ? ・ここで ・あちら ・こうすると～ ・どんな本?

② 集めた指示語を「こ」「そ」「あ」「ど」に分類し、表に整理して表す。

③ ペアで、こそあど言葉を使って会話を楽しみ、こそあど言葉の使い方を理解し、使えるようにする。

A: この本、おもしろいよ。 B: どの本? これかな。

A: あそこにある本は、だれのですか? B: あの本は、〇〇さんの本です。

第二段階 「文脈指示」の指示語

～説明的文章に出てくる「こそあど言葉」を見つけ、指し示しているところを当てよう!～

① 文章の最初に出てきた「こそあど言葉」が、指し示しているところを見つける。

・「その行列は、」 → 「ありの」

・「そのようなてきから、」 → 「魚」や「ざりがに」「げんごろう」などの水中にいるこん虫

② 指し示しているところが、「こそあど言葉」の前に書かれていることに気付く。

③ 文章中で使われている「こそあど言葉」は、多くの場合、その前に書かれていることを指し示している、ということを確認する。

・文章中から、「こそあど言葉」を、さらに、5個見つける。

・それぞれの「こそあど言葉」が指し示しているところに線を引く。

④ 3人のグループで、線を引いたところを確認め合う。

⑤ 「こそあど言葉」のところに、線を引いた言葉を入れ替えて読んでみる。

例) ・その行列は、 → ありの行列は、～。

・そのようなてきから、

→ 「魚」や「ざりがに」「げんごろう」などの水中にいるこん虫

ここがポイント!

・文章中で使われている「こそあど言葉」は、多くの場合、その前に書かれていることを指し示している。

・指し示している部分を、「こそあど言葉」のところに代入して、読んで確かめてみる。

○ 調 査 問 題

問題の学力のレベル
レベル 6-B

3

次の文の~~~~線部の言葉がくわしくしている言葉を
1~4の中から一つ選びましょう。

(2) わたしは 毎朝 仲良しの

友だちと 登校する。

○ 調査問題の趣旨・内容

修飾と被修飾の関係を正しく理解する力が身に付いているかどうかを見る問題

【問題内容】 4つの言葉の中から被修飾語を選択する。

【作成の趣旨】 修飾と被修飾の関係を正しく理解する力が身に付いているかどうかをみる問題である。この問題は問題文が、修飾語に被修飾語が続けて配置されている。そのため、修飾語の働きや修飾・被修飾の関係を正しく理解していないと間違えやすい。

○ 誤 答 分 析

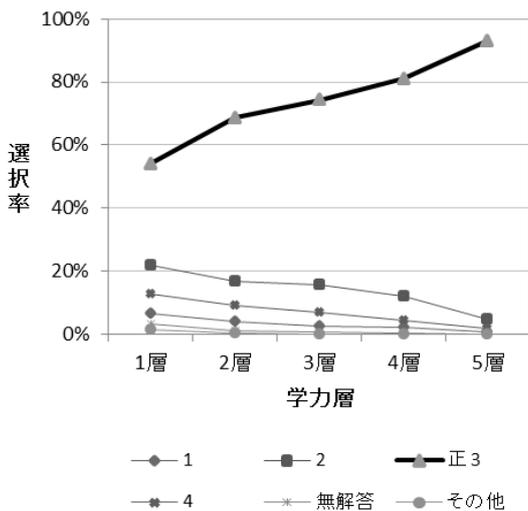
出題のねらい	1	2	③正答	4	無解答	その他
修飾と被修飾の関係を理解することができる。	3.0%	13.7%	75.2%	6.7%	1.0%	0.4%

正答率は、75.2%であり、誤答は、選択肢2が13.7%、選択肢4が6.7%、選択肢1が3.0%のような割合で分かれている。修飾語と被修飾語の配置が離れて出題されているもう1つの問題に比べ、正答率は高いが誤答が分散している。特に選択肢2（毎朝）を選んだ誤答が多いのは、修飾語の近くにある言葉を選んでしていると推測される。修飾語の働きや修飾語と被修飾語の関係が十分理解できていないため、問題の難易度が上がると修飾語・被修飾語を位置関係で捉えてしまうと考えられる。

そのため、文章をより詳しくする修飾語は、「どこで」「だれと」「どんな」「どのように」「どのくらい（数）」など様々あることを理解した上で、どの言葉を修飾しているのか、また、修飾・被修飾の関係に注目させる必要がある。

また、この問題は6年生にも出題されているが、正答率も誤答の傾向もほぼ同じである。学年が進んでも定着できているとは言い難い。「だれが」「いつ」「どこで」「何を」「どのように」「なぜ」という基本的な文の構成について、「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」の指導を行い、文章をより豊かにする表現力の育成が大切と思われる。

○ G - P 分析



- 5層の児童は、正答を選択した児童がほとんどだが、1層の児童は、正答率が50%である。修飾語と被修飾語の理解の状況に差があることがうかがわれる。
- 1層から4層までの児童は、誤答として選択肢2「毎朝」を選ぶ傾向がある。修飾語・被修飾語の関係の理解に課題があると考えられる。
- 主語・述語の関係が正しくとらえられず、文章内容を理解できないことが修飾語・被修飾語の理解状況の差につながっていると考えられる。
- 主語と述語の関係を再確認し、その上で修飾語・被修飾語の関係を定着させる指導が必要である。

○ 指導上の改善ポイント

修飾語の働きについて理解させる指導

【文をくわしくしよう】 (主語と述語からなる文に、修飾語を加えて文をくわしくしていく)

- ・ 3～4人のグループを作る。
- ・ **ぼくは** **行きました** というカードを真ん中に置く。
- ・ 修飾語のカード**友だちと** **公園へ** を渡し、4枚を並べ文にする。
- ・ 白紙のカードを渡し、さらに文を詳しくするための言葉を考えて書く。

※どの言葉をくわしくするのかを意識させる。

ぼくは 友だちと 公園へ 行きました。
 どのような友達？ どのような公園？ どのようにして行ったかな？



【くわしく書こうコンテストをしよう】

- ・ **花が** **咲きました** というカードを真ん中に置く。
- ・ グループで話し合いながら白紙のカードに修飾語を書き、組み合わせてわかりやすい文を作る。
- ・ 発表会

修飾語・被修飾語の関係を定着させる指導

- ・ **白い** **ねこが** **げんかんの前に** **ねている。** カードをばらばらに並べる。
- ・ 述語を見つける。・・・ **ねている。** ※述語はとらえやすいのでまず先に確認する。
- ・ 主語を見つける。・・・ **ねこが** ※ねていたのはだれか？
- ・ **ねこ** **ねている。** をくわしくしている言葉を見つける。
- 修飾語 **白い** → 被修飾語 **ねこ**
- 修飾語 **げんかんの前に** → 被修飾語 **ねている**
- ・ さらに **丸くなって** というカードを渡し、並べ方を考えて文を作る。 ※どこに入れるか考える。

文章の中で修飾語・被修飾語を意識させる指導

「読むこと」の学習活動で、叙述に即して読み取らせることで言葉の知識を定着させる。

(例) 「白いぼうし」

緑がゆれている やなぎの下に、 **かわいい** **白い** ぼうしが、 **ちょこんと** おいてあります。

叙述から思い浮かぶ様子を話し合う際、□の言葉による効果について考えさせることで、修飾語の働きについての理解を図っていく。

○ 調 査 問 題

問題の学力のレベル
レベル 9-A

- 4 3 2 1
- たくさんの 本を 学校へ 雨も
花だ。 買った。 行った。 降り出した。

3
次の1～4の文の中から、主語と述語の関係になっている文を一つ選びましょう。

○ 調査問題の趣旨・内容

文の構成を理解する力が身に付いているどうかをみる問題

【問題内容】 二文節で構成された文のうち、文節同士が主語・述語の関係になっているものを選択する。

【作成の趣旨】 この問題は、文を構成する上で基本的な要素となる主語・述語の意味を理解しているかどうかをみる問題である。この問題のポイントは、一文節目の「雨も」の「も」であり、主語は「〇〇は」や「〇〇が」だけでなく、「〇〇も」の形もあることを知識として理解しておく必要がある。この理解が不十分な場合には、どんなときに、「〇〇は」・「〇〇が」が、「〇〇も」になるのか（他にも同じ行動をした人物がいる等）を考えたり、「も」を「は」や「が」に置き換えて文の意味を考えたりすることが求められる。また、述語から主語を考えていくこと（「降り出した」のは何か。「行った」のは誰か。等）も身に付けさせたいことである。ただ知識を問うのではなく、どのように考えたらいいのかもみるねらいで、この問題を作成した。

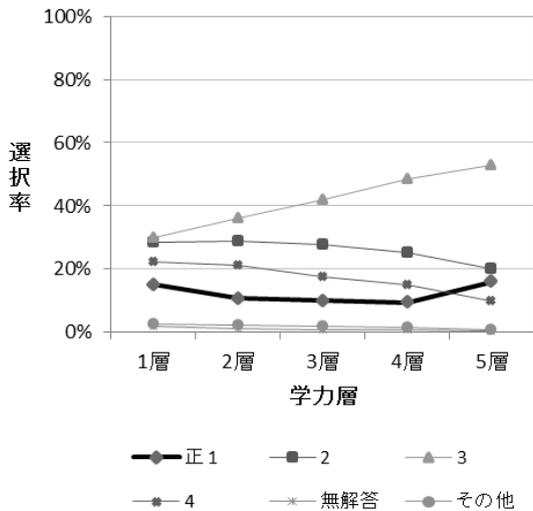
○ 誤 答 分 析

出題のねらい	解答類型	①正答	2	3	4	無解答	その他
主語・述語の関係になっている文を選択することができる		12.4%	25.7%	42.8%	16.5%	0.9%	1.7%

正答率は12.4%であり、他の問題と比べて低い。昨年度の調査結果でも、文の構成を理解する問題の正答率は低く、課題となっていた。

最も多かった誤答は、選択肢の3「本を 買った。」であり、次に多かった誤答は、選択肢の2「学校へ 行った。」であった。正答である選択肢の1「雨も 降り出した。」を選べた割合が最も少なかった。このことから、子供たちは、述語から主語を考えたときに、「誰が」にあたる主語がないことは分かっているが、「買った」や「行った」の動作の対象が人であることから、誤答を選択したことが考えられる。また、子供たちにとって主語は「〇〇は」や「〇〇が」という意識が強く、「〇〇も」の形もあることが定着していなかったと考えられる。

○ G - P 分析



- 全体の正答率は 12.4%と、低い結果となった。特に正答のグラフからは、1層と5層に該当する児童の正答率が同程度であることが読み取れる。このことから、この問題の難易度が高いことが分かる。また、2層～4層に該当する児童の正答率が同程度であり、1層と5層に該当する児童の正答率よりも低かった。
- 類型3 (誤答) のグラフに着目すると、1層～5層のすべてにおいて、児童の選択率が最も多く、特に学力層が上がるにつれ、選択している傾向といえる。また、4層～5層は、選択率がおよそ50%となっている。
- すべての層において、主語・述語の関係を理解しているとは言えない。述語から主語を考えたり、「○○は」「○○が」以外の形も定着させたりすることが大切である。

○ 指導上の改善ポイント

学習内容を明確にした誰にも分かる授業

【確認】 学習内容とは、「学習活動を通して身に付ける学力」であり、「学習課題の答えや答え方」である。

- 本調査問題の学習内容は、文の構成の中の「主語・述語の関係」である。具体的には、主語は「だれは」や「だれが」だけでなく、「だれも」の形もあることである。この学習内容は、第2学年までに定着させることとなっているが、2学年だけでなく、6学年までの間に繰り返し指導していくことが重要である。この学習内容を定着させるために、「教えること」と「考えさせること」を整理し、一人一人に応じた手立てによる誰にも分かる授業を意識した指導と支援が必要である。

(例) 「教えること」………主語・述語の関係 (主語「だれは」・「だれが」、述語「どうする」・「どんなだ」・「なんだ」)
 「考えさせること」…主語は、どういうときに「が」や「は」が「も」になるのか



- ※ グループによる話し合い活動を行う。話し合いの目的 (主語は、どういうときに「が」や「は」が「も」になるのかの結論を出す)を明確にし、一人一人が自分の考えや根拠を主体的に、対話的に話す場となるよう思考ツール等を活用する。話し合いの中で、お互いの考えを比較・分類・整理することで、深い学びとなるようにしていく。

できるまで指導し、一人一人を確実に伸ばす

※ 分からないまま、できないままにしないための取組例

【授業】

- (1) 机間指導による個別指導 (例) 主語・述語の関係の理解度の把握
 ※ 「分かった」「できた」という状態の見届け
- (2) 授業における「見通し」「学び合い」「まとめ」「振り返り」
 ア グループ学習による「学び合い」：自分の考えを説明し、友達のを聞き、さらに自分の考えを見直す。
 イ 「振り返り」：本時で新たに分かったことやできるようになったこと、よく分からなかったことを書く。
- (3) 授業のはじめの帯学習や朝学習による定着化 (復習シート、言語プリント等の活用)
- (4) 短作文や創作文、感想文の中で、主語と述語が対応した文の書き方の指導
- (5) 文学的文章や説明的文章を読むときに、主語・述語に着目するような発問
- (6) 校内言語テストやミニ言語テストの実施 (全員が合格するまで行う。)

【宿題】

- (1) 宿題の個別化
- (2) 復習シートの活用
- (3) 言語プリントフォルダの作成 (校内で共有)

○ 調査問題

- (4) ② 終わりの始まりもなくなってしまおうか。とありますが、これはどのようなことを表していますか。最もふさわしいものを、次の1〜4の中から一つ選びましょう。
- 1 二四時間放送の場合、自分がTVをつけたときが始まりなので、始まりが一つに決まらないということ
 - 2 二四時間放送の場合、放送していない時間帯がないので、始まりや終わりを決められないということ
 - 3 二四時間放送の場合、ついつい番組に夢中になってしまおうので、見るのをやめるのが難しいということ
 - 4 二四時間放送の場合、放送に切れ目がないので、自分が見終えたときが終わりになるということ

(長田弘「読書からはじまる」による)

(長田弘「読書からはじまる」による)。
おさだひろし

13

次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。なお、①〜⑦は段落番号です。

○ 調査問題の趣旨・内容

事例を正しく読み取り、事例を通して筆者が伝えたい意見を読み取る問題

【問題内容】 本文中の一文の意味を説明したものとして適切なものを選択する。

【作成の趣旨】 この問題は、事例を正しく読み取り、事例を通して筆者が伝えたい意見を読み取る問題である。この問題のポイントは、筆者が伝えたい「本」と人間のあり方や係わり方を理解し、テレビ(24時間放送)という事例との相違点を考えることである。筆者は、自分の伝えたい意見をより確実に読み手に伝えるためにテレビという事例を用いている。事例の効果を考え、事例の前後を通して、筆者が伝えたいことを読む力が求められている。

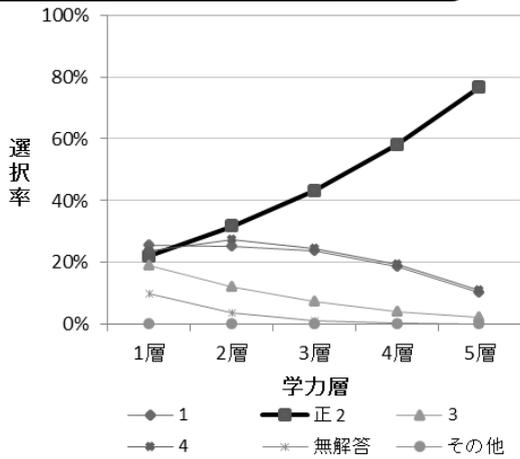
○ 誤答分析

出題のねらい	解答類型	1	②正答	3	4	無解答	その他
事例を正しく読み取り、事例を通して筆者が伝えたい意見を読み取ることができる		20%	48.6%	8.2%	20.5%	2.7%	0.0%

正答率は、48.6%であった。誤答は、選択肢1「24時間放送の場合、自分がTVをつけたときが始まりなので、始まりが一つに決まらないということ」が20%であり、ほぼ同率で選択肢4「24時間放送の場合、放送に切れ目がないので、自分が見終えたときが終わりになるということ」が20.5%であった。

選択肢1又は、4を選び誤答となった理由として共通していることは、2つとも「筆者の伝えたい意見」を捉えていないことである。前文の2文「放送が始まるときが始まりでしょうか。それぞれがTVをつけたときがはじまりで、」それぞれがTVを消したときが終わりになるでしょうか。」のどちらかを「筆者の伝えたい意見」と結び付けずに、その文だけで選択したものと予想できる。選択肢3は、本文中に一切出てこない意見のため、選んだ児童は極端に少ないと予想できる。

○ G - P 分析



- 1層の児童は、選択肢1、2、4をほぼ同じ選別率で選んでいて、3つの選択肢よりも若干低い率で選択肢3も選んでいる。つまり、どれを選んだらよいか分からない様子が見られる。
- 2層の児童は、選択肢1、2、4の選択の様子が1層の児童と似ているが、選択肢3を選ぶ児童が1層児童より大きく減り、選択肢3は違うと判断できている児童が増えたことが分かる。
- 3～5層の児童については、学力層が上がるにつれて選択肢2の選別率が上がり、選択肢2、4の選別率は低下するため、筆者の伝えたいことと事例の関係が正確に読めるようになっていくことがわかる。また、選択肢3を選ぶ児童は3層の児童から大きく減り、誤答だと明確に理解できていることが分かる。

○ 指導上の改善ポイント

筆者は、自分が伝えたいことを読み手に確実に伝えるために、①段落構成の工夫 ②事例・実験の導入 ③文末表現等の表現に関する工夫をする。説明的文章を指導する際、機械的に段落を分け、段落の内容を順番に読んで捉える指導が中心になってしまうと、「筆者は何を伝えたいのか」「だから、書きぶりをこのように工夫しているのだ」という視点が希薄になり、内容理解が難しくなってしまう。また、述べられている内容が、自分とは関係のないもの、何か難しいものと児童は捉えてしまう可能性もあり、内容理解の困難さを助長してしまうこともある。

説明的文章を正確に読む力を付けるためには、ポイントが3つある。

【ここがポイント！】

- ①説明的文章を構造的に読む！
- ②筆者の書きぶりの工夫やその効果を考える！
- ③筆者の伝えたい意見や事例と自分の実生活での体験などを結び付ける！

《本調査問題を例に》

ポイント①：説明的文章を構造的に読む！ ①・②

本調査問題を正確に解くためには、このような単元計画のもと、ポイント②・③（展開：③・④）の指導の工夫が有効だと考えられる。

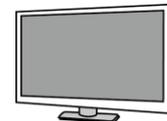


②「本」を話題に、本と人間のありよう、「真の友人としての本とは」を伝えたいのですね。

ポイント②：筆者の書きぶり（ここでは③は事例の扱い方）の工夫やその効果を考える！

③①と⑦を読めば、筆者の伝えたい意見はわかった。でも、わざわざ、**なか**で「暦とカレンダー」「テレビ」を事例として出しているのはなぜだろう？この事例を入れることでどんなことがわかりやすくなる？
→特にテレビ（本調査）では、「終わり」と「始まり」に注目！

①筆者は、何を話題にどんなことわたりたたちに伝えたいのだろうか？
※**はじめ** **おわり**の段落の役割は、**小学校3年生からの指導事項**



事例から実体験へ
実体験から事例へ

ポイント③：筆者の伝えたい意見や事例と自分の実生活での体験などを結び付ける！ ④・⑤

④ みんなは、暦やカレンダーを読んだときに、筆者が言っているようなこと経験がないかな？
※ 実物を持ってくるのもよい
いつものテレビの見方で筆者が言っているようなことはないかな？

⑤ この説明的文章を読んで感想を書きましょう。
筆者（長田さん）に手紙を書きましょう。
※ 学習のまとめとして、自分の言葉で読んだことをまとめる、理解したことや納得したところをまとめる。その後、交流会をしてもう一度本文を読む。